吉高人権だより

２０２１年　５月号

愛媛県立吉田高等学校　人権委員会発行

コロナ禍に思う

校長　上田　正弘

塔和子文学碑（明浜町）

皆さんは、塔和子さんという人を知っていますか。塔さんは、昭和４（1929）年、愛媛県明浜町（現西予市明浜町）で生まれました。国民学校初等科（小学校）の時にハンセン病にかかり、昭和18（1943）年、13歳で国立療養所大島青松園（現香川県高松市庵治町）に入所しました。当時、ハンセン病は不治の病と恐れられていました。そのため、患者は、国が進める隔離政策によって全国に設けられた療養所に強制的に入所させられました。しかし、塔さんが療養所に入所した昭和18年には、アメリカで「プロミン」という特効薬が開発されており、ハンセン病は治癒する病気となっていました。

22歳の頃、特効薬で塔さんの病気は完治しました。しかし、戦後、治癒する病気であるということが分かっても、病気に対する無知や「らい予防法」の制定等によってハンセン病患者・回復者等に対する偏見や差別はなくなりませんでした。そのため、塔さんは故郷に帰ることができず、その後も療養所で暮らしました。そういったなか、塔さんは24歳頃から短歌や詩の創作活動を始めました。その後、自分の日々の心情を紡いだ19冊の詩集を発表し、平成11（1999）年には、その年の最優秀詩集に贈られる高見順賞を受賞しました。

上記写真の文学碑は、塔さんの地元の方々の請願によって平成19（2007）年に建立されたものです。塔さんは、その後、平成25（2013）年に大島青松園で亡くなりました。その遺骨は、園内の納骨堂におさめられましたが、平成26（2014）年に分骨され、いまは両親が眠る明浜町の墓に納骨されています。

昨年来、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、感染者やその家族に対する誹謗中傷・差別が見受けられます。そこには、ハンセン病患者・回復者等に対する偏見・差別と同じ構図が感じられます。誤った情報や無知が、偏見や差別を助長しています。同和問題をはじめとする様々な人権問題を解決するためには、まず、正しい知識を身に付ける必要があります。その上で、誤った情報やうわさに惑わされることなく、何が正しくて、何が正しくないのかを自分で判断し、問題の解決に向けて主体的に行動する必要があります。そのために必要とされる知識・技能・態度を、高校での人権・同和教育を通じて身に付けてください。

塔和子さんの『胸の泉に』という詩を紹介します。

『胸の泉に』

かかわらなければ
この愛しさを知るすべはなかった
この親しさは湧かなかった
この大らかな依存の安らいは
得られなかった
この甘い思いや
さびしい思いも知らなかった
人はかかわることから
さまざまな思いを知る
子は親とかかわり
親は子とかかわることによって
恋も友情も
かかわることから始まって
かかわったが故に起こる
幸や不幸を
積み重ねて大きくなり
繰り返すことで磨かれ
そして人は
人の間で思いを削り
思いをふくらませ
生を綴る
何億の人がいようとも
かかわらなければ路傍の人
私の胸の泉に
枯れ葉いちまいも
落としてはくれない

御意見・御感想をお聞かせください。

年　　組　　生徒　・　保護者